

浅草寺(東京都台東区)の五重塔で、屋根の改修工事が進んでいる。宝蔵門(2007年5月完工)と本堂(10年11月完工)に次ぎ、1973年(昭48)以来43年ぶりのリニューアル。素材には従来のアルミ合金瓦から軽量で高耐久なチタン成型瓦を採用し、屋根材の製造と葺き替えはカナメ(本社・宇都宮市、社長・吉原正博氏)が担う。生産と工事の現場を訪ね、荘厳なたたずまい演出する舞台裏に迫った。

(中野 裕介)

6月中旬。カナメの喜多方工場(福島県喜多方市関柴町)を訪れるや、チタンのコイルが姿を見せた。原板は新日鉄住金の光製造部(山口県光市)で生産したものだ。浅草寺が五重塔で採用を決めたチタン成型瓦「チタンカナメ段付本瓦葺き」の成型ラインがコイルの置場と隣り合う。

濃淡3色、色むらの良さを引き出す

成型ラインでは、スリットしたコイルが瞬く間に4つのプレス工程を経て1枚の屋根材に仕上がる。厚さは0.3㎜に対し、重量は一般的な本瓦の20分の1。軽量で薄いチタン固有の特性が手に伝わった。五重塔の葺き替えには、約5万7千枚の屋根材を使用する。



浅草寺・五重塔の屋根改修工事



屋根改修前の五重塔

宝蔵門で約4万枚、本堂で約8万9千枚に上る。一枚一枚据え付ける。本堂の改修時と同様に、濃淡が導く3種類を取りそろえる一方、さらにいぶし瓦に配色が近づくよう改良し、美観を追求する。どの場所にも色をばらばらにせず、色むらの良さを引き出すため、工場では5層に分けた工区では上部詰める段階で順不同に混ぜる。板金職人は箱を据えた後に屋根材を葺いていく。

5万7000枚で荘厳なたたずまい演出



屋根材の母材



実際の屋根材

れた際には、20代から40代までの4人が上から2番目を施工する。ただ中木下地に半円状の木を並べた後、間に断熱材を敷く。半円の部分には山瓦を嵌め、工具で断熱材



新開発の素材と金型、工法が融合

11月初めに工事現場を訪

じ層でも端にいくに連れて反りが出てくるなど、屋根の形状に応じて施工時に細かな微調整が欠かせない。世界に誇る板金職人の「腕」が、時代を超えて紡がれる「伝統の美」を丁寧に再現する。

成型ライン

屋根材は、規格や仕様が統一しているとはいえず、同じ層でも端にいくに連れて反りが出てくるなど、屋根の形状に応じて施工時に細かな微調整が欠かせない。世界に誇る板金職人の「腕」が、時代を超えて紡がれる「伝統の美」を丁寧に再現する。

チタン成型瓦に葺き替え

板金職人

世界に誇る「腕」が伝統の美再現

チタン成型瓦「チタンカナメ段付本瓦葺き」は2006年、カナメが築き上げた寺社屋根の板金技術から生まれた新工法と、新しい

チタンも複雑な形状の加工が困難な材料の開

材の開だ。チタンも複雑な形状の加工が困難な材料の開だ。チタンも複雑な形状の加工が困難な材料の開だ。

そこで新日本製鉄(現在)のチタン成型瓦の金型を導いた。2007年には第2回も、大谷賞を受賞したのをはじめる。国内外から年間約3千万人の参拝者が訪れる浅草寺。来春にも五重塔で屋根の改修工事が完了する。新しい新たなシンボルのお披露目が間近に迫る。

つくしまものづくり大賞や大谷美術館賞などにも輝いた。国内外から年間約3千万人の参拝者が訪れる浅草寺。来春にも五重塔で屋根の改修工事が完了する。新しい新たなシンボルのお披露目が間近に迫る。



完成時のイメージ



最高部から望む工事現場の様子



一人ひとりの腕が光る



10月中旬から葺き替え工事が始まった



20〜40代の職人が携わる